

オプション教材ヘチマ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。
作文用紙の余白などに書いても結構です）

4.

5.

6.

7.

8.

9.

10.

11.

12.

13.

14.

15.

16.

17.

18.

19.

20.

21.

22.

23.

24.

25.

26.

27.

28.

29.

30.

31.

32.

33.

34.

35.

36.

37.

38.

39.

40.

41.

42.

43.

44.

45.

46.

47.

48.

49.

50.

51.

52.

53.

54.

55.

56.

57.

58.

59.

60.

61.

62.

63.

64.

65.

66.

67.

68.

69.

70.

71.

72.

73.

74.

75.

76.

77.

78.

79.

80.

81.

82.

83.

84.

85.

86.

87.

88.

89.

90.

91.

92.

93.

94.

95.

96.

97.

98.

99.

100.

101.

102.

103.

104.

105.

106.

107.

108.

109.

110.

111.

112.

113.

114.

115.

116.

117.

118.

119.

120.

121.

122.

123.

124.

125.

126.

127.

128.

129.

130.

131.

132.

133.

134.

135.

136.

137.

138.

139.

140.

141.

142.

143.

144.

145.

146.

147.

148.

149.

150.

151.

152.

153.

154.

155.

156.

157.

158.

159.

160.

161.

162.

163.

164.

165.

166.

167.

168.

169.

170.

171.

172.

173.

174.

175.

176.

177.

178.

179.

180.

181.

182.

183.

184.

185.

186.

187.

188.

189.

190.

191.

192.

193.

194.

195.

196.

197.

198.

199.

200.

201.

202.

203.

204.

205.

206.

207.

208.

209.

210.

211.

212.

213.

214.

215.

216.

217.

218.

219.

220.

221.

222.

223.

224.

225.

226.

227.

228.

229.

230.

231.

232.

233.

234.

235.

236.

237.

238.

239.

240.

241.

242.

243.

244.

245.

246.

247.

248.

249.

250.

251.

252.

253.

254.

255.

256.

257.

258.

259.

260.

261.

262.

263.

264.

265.

266.

267.

268.

269.

270.

271.

272.

273.

274.

275.

276.

277.

278.

279.

280.

281.

282.

283.

284.

285.

286.

287.

288.

289.

290.

291.

292.

293.

294.

295.

296.

297.

298.

299.

300.

301.

302.

303.

304.

305.

306.

307.

308.

309.

310.

311.

312.

313.

314.

315.

316.

317.

318.

319.

320.

321.

322.

323.

324.

325.

326.

327.

328.

32

旅は一人でするのがいいだろうか。誰かと二人でするのがいいだろうか。それとも、グループでするのがいいだろうか。これは意外に答えにくい難問である。がそれでも、一度考えてみるに値する問題を含んでいえるだろう。なぜなら、旅を一人するか、二人するか、それともグループにするかによって、同じく旅とはいってもかなり性格のちがったものになるからである。

本当に旅の好きな人は、ふと思いついたときに一人でぶらりと旅に出かける、といわれる。日常の人間関係のしがらみから離れ、足の相談す必要もなく、自分一人の思うがままにどこへでも行くことができる上に、旅の仕方についても誰の遠慮もいらないからである。旅の在り様として自由と偶然性をもっともよく享受できるのは一人旅である。また、旅先でもっとも直接に現実と触れうるのも、自分をよく見つめるのも、一人の旅であろう。

定住社会のなかに生きていると、ひとはしばしば、日常生活のわずらわしいしきたりや拘束をのがれて一人でどこか遠いところへ行つてしまいたくなる。が、実際にそれができる人はきわめて少ない。ほとんどの場合、ただそうしたいと心で思うだけで実行はできず、したがって思いだけがつのるようになる。だからこそ、人々の間で自由で奔放な一人旅、放浪への願望が根づいたのである。そして、放浪という名の一人旅には、絶対的自由へのあこがれがある。

このように、たしかに旅は一人でするとき、本人にとつてもっとも自由で解放的で冒険に富んだものになる。また一人旅では、ほかに相談する相手が身近にいないから、すべてにつけて自分で思案しなければならぬ。そのために、自分自身との間での対話を活発に行なわなければならぬことになる。一人旅では私たちは、そういうかたちで旅先での現実に対峙するのである。けれどもこれは実際には、なかなかたいへんで骨の折れることであると、息をぬくひまがなく、心の余裕がなくなるからである。そのために緊張の連続が強いられ、どうしても隙ができてしまう。

だから一人で異国の旅をしていると、ほとんど不可抗力に近いかたちで、荷物の一部を置き引きされたり、スリに出会ったりするのである。かく言う私自身、先達でもミラノの街で三人組のスリに出会って、半ば気がつきながらみすみすかなりの大金を盗られてしまった。相手があまりにもみごとな腕、みごとなチーム・ワークだったのでもちろん盗られたことは腹立たしく、その後何日も不愉快でしうがなかったけれど——実はちよつと感心さえしている。

(中略)

掏られた金は、私にとつてかなりの大金だったけれど、幸い、旅行をつづける上で支障になるほどではなかった。しかしその後しばらくの間、旅行をしていてもどうしても必要以上に他人に対して警戒心が働いてしまい、ひどく気が疲れた。そういうときほど、一人で旅をしていること、相棒なしに旅をしているのがうらめしく思われることはない。相棒あるいは道づれがあつたからといって、スリに会う心配がまったくないというわけではないけれど、二人になれば注意の及ばない死角はずつと少なくなるし、行動にずつと余裕がもてるようになる。

それに同行者としていい相棒が得られれば、旅をする上でなにかと都合な相談相手になるし、話し合うことで旅での経験を確かめ合うこともできる。ただし実際には、この道づれのえらび方はたいへん難しい。不適當な道づれをえらべば、互いに相手の自由な行動を牽制し合ったり、束縛し合ったりすることになるだろう。互いに相手の独立性と自由をできるだけ尊重しながら、しかも必要なとき、いざというときには力になり合い、よき相談相手になるような関係がもっとも望ましいわけだ。いや、それほど理想的な関係が成り立たなくとも構わない。旅において道づれがいることは、自分以外のもう一つの眼、他者を含み、その他者との対話をもちうるという点で貴重なことなのである。

では次に、グループの旅はどうだろうか。一口にグループでの

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

旅といっても、気心の知れた親しい友人たちとの少人数の旅の場合と、いわゆる団体旅行、セット旅行の場合とは、一緒には考えられない。前者の場合には、グループでの旅といっても、よき道づれとの二人での旅と本質的にはあまり異ならないものでありうる。うまくいけば、人それぞれの独立性と自由を保ちうるからである。また、自己と他者との関係が固定的でなく可動的だから、その関係がうまく生かされれば、旅はいつそう豊かなものになるだろう。

ただし人数があまり多くなると、人それぞれが旅先で現実にふれることよりも、グループ内の相互のふれ合い、付き合いの方に重点がかかってくる。だからグループでの旅はしばしば移動する宴会のようなものになるのである。いわゆる団体旅行、セット旅行の場合には、あらかじめ決められたコースがあつて、スケジュールもびつとりつまっているから、また、バスに乗ったままでお目あてのところに連れていつてくれるから旅ならではの独立性、自由、偶然性、異質の現実などの接触が著しく弱くなる。もちろんそのようなグループ旅行も使い方によるし、そこで収穫にめぐまれることもあるけれど、その場合、旅のあり方も同行者のあり方もずいぶんちがつてきているわけである。

(中村雄二郎「知の旅への誘い」)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



帰国生の教育体験調査をつづけるうちに、日本と欧米の授業方法の違いが、だんだんにはっきりしてきました。それを、あえて一言でいえば、欧米では獲得型授業が、日本では知識注入型授業が一般的だということになります。

では獲得型授業とはどういうものなのでしょうか。もう少し詳しく考えてみましょう。獲得型授業には二つの面が含まれます。一つは、生徒が自主的に学んでいけるように、その学び方を訓練していくことです。生徒一人ひとりが自分でテーマを決め、ある課題にとりくんでいくなかで、内容を学ぶだけでなく、リサーチの仕方も身につけてゆくというものです。生徒が自ら学ぶという意味で、これを「自学の訓練」とよんでもよいものです。たとえば、日本の学校の提出物にはレポートという一つの言葉が使われているのですが、アメリカではプロジェクト、レポート、エッセー、リサーチ・ペーパーなどのようにたくさん言葉が使われています。こうしたことから、いかに自分で学ぶ学習がさかに行なわれているかがわかるはずで

す。獲得型授業のもう一つの側面は、参加型の学習です。授業のなかに生徒の発言、発表、討論などをさかんに組みこんで、生徒の授業への参加を促すものです。よく言われることですが、欧米の授業では、先生がたえず「きみの考えはどうか」と生徒に問いかけ、意見の表明を求めます。また、講義式授業であっても、その途中から、即興ディベートに移っていくことなどもけつして珍しいことではありません。

もちろん、調べたり、書いたりする自学の訓練の側面と、発表したり、討論したりする参加型授業の側面とは、たがいに密接に関連し合うものです。調べたり、書いたり、発表したり、討論したりすることは、一連の学習活動となつてい

るのです。そして、地球時代を迎えたいま、若者に求められる資質は、こうした獲得型の学習のなかでこそ育ってくるものなのです。日本に教育方法の国際化が必要だという理由は、こうしたことにもあらわれています。

では一方、日本の授業として一般的な、知識注入型授業とはどのようなものでしょうか。その基本形態は、私たちが日ごろよく

んでいるもの、つまり一斉講義式の授業です。この授業では先生が教壇の上から生徒に知識を注ぎこみます。まるで、花に水を注ぐように。知識は高いところから低いところへと流れていきます。生徒は懸命に板書内容をノートし、どれだけ内容を暗記できたかについて、試験でチェックを受けるとい

う方式です。この形態の授業は、たくさん

の生徒に、系統的な知識を、限られた

時間で、しかも大量に伝えるには有効な方法です。その意味では効率的な授業方法だと言つてもよいかもしれ

ません。このため、知識注入型授業は、日本と同じように一クラスあたりの

生徒数が多い韓国、中国、台湾、シンガポールなどのような東アジア

諸国でもごく一般的な形態になつて

います。ただ、知識注入型の授業では、どうしても生徒側は受け身の姿勢に終始してしまいがち

です。獲得型の授業に慣れた帰国生が、知識注入型の授業に参加感がもてないという感想をもつのも、こうしたところからきて

います。日本でもそうですが、いまあげたこれらのくには、授業で国定・

検定教科書を使い、ほとんど同じ内容を全国一斉に教えています。ま

たいずれの国にも激しい受験競争があり、勉強すること自体が受験の

ための手段となつて

いる状況が見られます。ですから、いまの知識注入型授業から獲得型の方向へむけて授業の

形態を移しかえていくことは、けつして容易なことではありません。な

にしろ、働いている制約条件があまりにも大きいからです。しか

し、そうはいっても国際化の波がおしよせるにつれて、知識注入型授

業にもとづくためこみ教育の弊害が、いよいよはつきり見えるよう

になつたことも事実なのです。

（渡部淳「国際感覚ってなんだろう」）



いま日本の若者の多くが、受験競争の中で苦しんでいます。そして渦中からゆうにいる受験生は、こんな苦しい状況じょうきょうにおかれているのは、きつと日本の生徒だけだろうと思ってしまうがちです。しかし、じつはそうではありません。近隣諸国の受験競争の激しさも相当なものなのです。

おとなりの韓国も事情は同じです。私がソウル市内の高校をはじめて見学したのは一九八〇年代の前半のことでしたが、日本の学校との類似点の多さに目をみはった経験があります。とりわけ、韓国の受験競争のきびしさは、日本に勝るとも劣らないものでした。

(中略)

もう一つの隣国・中国の入学試験もたいへんな狭き門です。中国の大学進学率は日本ほど高くありませんが、入学定員自体が少ないため、競争は激烈です。北京からの留学生・王立軍（ワンリージュン）さんはつぎのように語ります。

「中国の受験生は本当によく勉強します。ぼくの場合も、高校二年生から本格的に受験勉強をはじめ、三年生では受験一色の生活になりました。家ではもちろん、学校の休み時間にも、寸暇を惜しんで、友だちと教え合ったりしながら勉強しました。入試が終わったとたんにとつと疲れが出てしまい、熱を出して三か月ほど入院してしまいました。精神疲労がピークになっていたんだと思います。」

さいわい王さんは、北京にある文科系の大学に合格することができました。その後、経済学を学ぶために日本に来て、いまは都内の大学の二年生に在籍しています。

中国の大学はすべて国立大学で、学生は授業料を免除されています。全員が学生寮で暮らしていますが、寮費や生活費も政府から支給されています。

「中国の大学生は、特別に恵まれた環境をあたえられて勉強している身分です。遊びほうけている学生はいません。そのかわり、大学の勉強は厳しかったですよ。定期試験の場合も、先生が範囲を告げるだけ。日本のように傾向と対策のようなものはいっさ

い教えてくれません。それでできなかったら落第ですから、みんな必死なんです。」

授業形態は日本と同じで、講義形式がほとんどです。ただ、日本の大学に入って王さんが驚いたことがあります。

「日本の学生は、ほとんど先生に質問しないんですね。こんな質問をしたら周囲の学生にどう思われるかというような遠慮もあるようです。中国では、授業が一区切りすると、学生がばらばらと教壇のまわりに集まってきて、先生に質問します。別に質問したからといって、平常点が上がるとか、評価が変わるというわけではありません。ただ、やる気のある学生ほど、熱心に質問するものだという雰囲気はありますね。その熱意をわざわざ隠す必要はどこにもありませんから、いきおい質問は活発になるんです。」

この指摘に、またまた考えさせられてしまいました。じつは王さんと同じような意見を、ほかの国の留学生たちからも聞かされているからです。どうも、日本の大学生の積極性のなさは、留学生の目に奇異なものと映るようです。だとすれば、知識注入型の授業だから学生が受け身の姿勢になつていっているというだけでなく、日本の場合にはもつと深い原因があるということになるはずですよ。

わたなべあつし

(渡部淳「国際感覚ってなんだろう」)



十年ほど前、ボルドーの近くを走っていて、くるまの接触事故をおこしたことがある。人身には何の影響もなかったし、こちらの日本製の車体がへこんだくらいで、何と日本のくるまは弱いんだといましましいくらいのものであったが、——それにこちらにも言い分があり、相手にも幾分の非があったのだが——。

それでも口をついて出たのは「すみません」ということばであった。相手は朴訥な農民夫婦で「はじめてパリへ行つて無事故で帰つてきたのに……」と愚痴をさんざん並べていた。

しばらくして「しまった」と思った。「すみません」とは、あやまり文句である。こちらがあやまつてしまえばもうそれでおしまい。非はすべて当方がかぶらねばならない。

そのことは、フランスへ来て、くどく言われていたのだ。問題をおこしたら、ぜったいにあやまつてはいけない。こちらの責任がいくら明白なときでも、まず「汝ニ咎ガアル」(vous avez tort)と言うべきである。そうでないと、賠償責任はすべてこちらが負わねばならぬ。「すみません」とは口が裂けても(——はちと

大げさだが)言つてはならぬ。自動車保険の契約の注意書にさえ「事故のときにあやまつてはならぬ」と書いてある。にもかかわらず、日本人である私はつい「すみません」と言つてしまった。習慣はおそろしいものである。

リリアヌ・エルという女性は「あやまるということ」(『潮』

昭和五十三年四月号)というエッセイの中で、日仏比較文化のおもしろい観点を出している。日本人は簡単にあやまる。フランス人はなかなかあやまらない。どうしてか、という問題である。彼女の引いている例は、仲間を裏切ったやくざが、のちに仲間に残りを受けるというテレビドラマの場面である。彼女は同じ状況を描いたドラマを日本とフランスで見た。状況と結果はまったく同じである。どちらも、見下げた奴として仲間に残られ、ゆるされる。ところが、その過程の、憐みを乞う文句がちがう。日本だと「悪かった! 許してくれ」と言い、フランスだと「おれが悪いんじゃない! 殺さないでくれ」と言う。まるで正反対である。

ここで私が言いたいのは、フランスでの「自分が悪かった」ということばの重みである。神の前で自己の全人格を否認するということ、それが自分の悪をみとめるということである。これは勇氣ある行為である。もし、やくざがそんな勇氣ある行為を示せば、人は彼を尊敬し、そして簡単に殺してしまうだろう。憐みを乞うたことにはならないのだ。憐みを乞う場合は、状況が悪かったとくどくど弁解しなければならぬのだ。

日本ではちやうど逆である。弁解すれば、憐みはかけてもらえぬ。弁解は理屈であり、理屈は卑怯である。ただ一言、悪かったとあやまる。この頭を下げるというのが、日本社会でゆるしのえられる唯一の行為である。

「悪かった」と言つても、日本では勇氣ある行為とはいえない。みんな、いつでも「悪かった」とあやまる。つまり社会的定型である。人は、定型によつて憐みを求め、定型によつて憐みを与える。物を言っているのは、文化の型である。

(中略)

絶対の罪というものはない。しかし、おたがい小さな悪、小さな迷惑をかけあつてゐる。それは無意識の領域にちらばつてゐるのだから、たえず「すみません」と言う。「すみませんで済むか」と言われればその通り、といった重大な場面では、「ではどうすれば済むのですか、あなたの気持ちの済むようになさってください」という「すみません」の語源に迫るような科白も出てくる。もつとも「どうすれば済むのか」という反問したい、あやまる文化の型にそむいている。これは日本では反抗であり皮肉である。

というわけで、もつぱら私たちは腰を低くしている。日本文化の型になじんだ外国人のなかには、腰を——というより背をかがめて愛想笑いをふりまく人もいる。いつだったか、約束をたがえた外国人がおり、その人物、次に私に会ったとき、彼は「日本ふう」に背を海老のようにまげ、謝罪したものである。その極端な姿勢

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

におどろいた。私たちは、外国人という鏡に映った自分たちの文化の姿におどろくのである。

エルさんはフランス人の論理好きには、二つの種類があるという。客観的、普遍的な論理と、もう一つは、自分の立場をあくまで正当化しようとする論理癖と、である。後者の、いわばフランス人の癖のようないものが前者を形づくり、前者が逆に、後者の癖を助長するということがあるのだろう。

とりあえずあやまるという日本文化には、人と人とのつながりをなめらかにするという普遍的知恵に通じるものがある。同時に、何でも「すみません」で通そうとするあつかましきもある。済むとか済まないとか——そんなことを意識しないで、ともかく「すみません」と言っている。感謝でも謝罪でもない。「すみません」というのは、あやまる文化の型をつたえることばである。同時に、安直なことばでもある。後者はむしろ、伝統をなくすしにする面がある。

ひとつのことばをめぐって、伝統と、それをなくすしにしようという力と、その双方がせめぎあっているようである。

ことばはむずかしいものである。ことばの解釈もむずかしいものである。外国人は、あやまる文化に卑屈さを見いだして感心したりするが、事は（少なくとも今は）それほど簡単ではないように思われる。

（多田道太郎『日本語の作法』）



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



学生さんが引き取ってほしい、と小説を二十冊ほど運んできた。全部、一人の作家の著作。現在活躍中の若い著者で、残念ながら古書価はつかない。大事にしなさい、とおひきとり願った。大事にせよ、は古本屋のお断り辞令である。だが学生には通用しない。若者に人気のある作家だから確実に売れる、と演説を始めた。ひいきにする著者ゆえ無理もない。しかし商売は別だ。

何度も固辞したが、無料でよいから棚に並べてほしい、と哀願する。敬愛する作家がかわいそうだ、と泣き言を言い出した。まさかタダでもらうわけにはいかない、なにがしを払って引き取った。わずらわしくなったのである。こっそり捨てればよい、という腹だった。

ところが翌日やってきて、売れましたか？ と聞く。彼は自分の旧蔵書が棚に並べられていない不当をなじりだした。買えば当方の勝手だ、と私は抗弁した。いや本の場合は別だ、客がゆだねたのであつて、古本屋は売らねばならぬ使命がある、とご託を並べ始めた。

古本屋に作家の作品を殺す権利はない、と気色ばんだ。うるさくてかなわないので、棚の一隅に全部陳列した。学生はこれを見て満足して帰った。

どうせ売れるわけがないのである。古本屋の評価は根柢があいまいとは言うものの、食いぶちに即ね返るので勤の働きは鋭いのだ。

一カ月たった。案の定、一冊も売れない。手に取る客もない。ほおれ見たことか、と私は思わず手を打ったが、喜んでいる場合じゃない。勤勞奉仕ではないのである。学生がやってきて、まだ売れませんか、とあきれている。ご主人が販売に不熱心だからだ、と八つ当たりするので一喝した。あやうく作家の悪口を言いそうになった。そんなに気がもめるなら、いつそ君が引き取れ、とふてくされると、そうしますと素直に応じた。

こちらの買入れ値の五割増しで買い戻してくればよい、と機嫌を直すと、そんな馬鹿な、一、二割の手数料がいいところでしよう、と言う。なら売らぬ、と私はつむじを曲げた。

君は自分の尊敬する作家を値ぎるのか、となじると、学生はひるんだ。理屈はそうなる、と畳みかけると、撤回します、と頭をさげた。多少こましくれていても、彼は案外気のいい奴かもしれないなかった。自分の旧蔵書をバッグにつめながら、結局自分は何をしていたんだろう、とつぶやいた。そして顔をあげて真剣に訴えた。「本屋さん、ぼくの読書はまちがっているんでしょか。だってぼくの読んでいる本の古本価値がこんなに安いなんて、なんだか情けなくなりまして。読書の値うちがまるでない」

そこで古書価というものは当てにならぬものなのだ、と冒頭の話をした。

（出久根達郎『読書の値うち』）



校庭の隅の水道場で、蛇口に口をつけて水を飲んでゐる竜夫の頭上で、あつという声が聞こえた。竜夫が顔をあげると、同じクラスの女生徒が薄笑いを浮かべて立っていた。

「いまそこで英子ちゃんも水を飲んだがや。英子ちゃん、きつと喜ぶわア……」

「だら、変なこというな」

竜夫は口や顎を濡らしたまま、校庭を走っていった。どこをめざして走っているのか判らなかつた。その女生徒の思いがけない言葉で顔を火照らしていた。

授業が始まると、竜夫は窓ぎわの席に座っている英子を何度も盗み見た。

竜夫は授業が済み教室を出て廊下を歩いていく英子をうしろから呼び止めた。

「銀爺ちゃんが蛍狩りに行こうつて。英子ちゃんも一緒に行かんけ？」

「……あの螢のこと？」

英子は銀蔵の話覚えていた。

「うん、今年はきつと出るつて。ことしを外したら、もういつ出るか判らなくて銀爺ちゃんが言うてるがや」

英子はもともと無口な娘であつた。竜夫の肩のあたりに目をやりながら、黙つて考えこんでいた。中学に入つて、こうやつて二人きりで言葉を交わすのは初めてのことだつた。

「いつ行くがや」

「……まだ判らん、田植の始める頃が、螢の時期やと」

「母さんに聞いてみる」

「おばさん、きつと駄目やつて言うに決まつとる」

「……なア。そんなこと言わんよ」

「英子ちゃんは行きたいが？」

「うん……行きたい」

同じ年頃の娘たちと比べると、英子はそんなに背の高いほうではなかつたが、それでも一時期竜夫よりも大きかつた時がある。

竜夫が晩生だつたからだ、いまこうして並んでみると、いつのまにかはるかに竜夫の方が大きくなつていた。

竜夫はふと英子に閑根のことを話したい衝動にかられた。自分の前から永久に姿を消してしまつた友もまた、自分と同じように、いやひよつとしたら自分よりもつとひたむきに、英子に魅かれていたのであつた。

「閑根が英子ちゃんの写真を持つとつたがや」

と竜夫は言つた。英子は決して閑根のことを悪く思わないだろうという確信があつた。

「……写真？」

「うん。英子ちゃんの机から盗んだがや」

思い当たるように、英子は目を見睜いて、遠くに視線をそらした。日ざかりの道を自転車に乗つて遠ざかつていく閑根圭太の最後の姿を思い出すと、竜夫は突然英子に対して無防備になつていった。

「その写真を、俺、閑根からもらたがや。友情のしるしやと云うて、閑根がくれたがや」

その時、級友たちが廊下の向こうからやつてくるのが見えた。竜夫は慌てて、英子に言つた。

「蛍狩り、行く？」

「うん、行く。母さんに頼んでみる」

竜夫は教室に駆けもどつた。誰かに話しかけられて、それに答え返す竜夫の声が、いつまでも上ずつていた。

次の授業が始まつてすぐ、用務員が教室に入つてきて、教師に何やら耳打ちした。教師は竜夫の席まで来ると、

「校門のところでお母さんが待つとられるから帰れ……」

と囁いた。竜夫は、父が死ぬのだとその瞬間思つた。教室を出ていく竜夫を級友たちは一斉に見つめていた。窓ぎわの英子の顔がぼつと白くかすんで見えた。

(宮本輝『螢川』)



「うるせえんだよ、あいつ」「つたく、ちよームカつくよな」——少年ではない。少女たちの会話である。電車のなかや街で、こういった言葉づかいを耳にすることは、珍しくない。

「最近の女の子ときたら、まったく嘆かわしい」と嘆息されるかたも多いだろう。身内にそういう女の子がいれば「なんて言葉をつかうんだ。はしたない」と叱る人も多いと思う。

なぜ、彼女たちは、このような乱暴な言葉づかいをするのだろうか。ひとつは、「女らしさ」という社会通念を破ることへの、爽快感ではないかと思う。「女の子は女の子らしく」という、ある意味では大人からの押しつけの価値観がある。それへの反発ではないだろうか。

乱暴な言い方を初めて試してみたとき、やはり彼女たちには彼女たちなりの、抵抗感があつたことだろう。が、ひとたび垣根を越えてしまうと、意外なほど、らくちんでさっぱりした世界が広がっていた。

今ほど極端ではないけれど、私が高校生のころは、女子生徒のあいだで、自分のことを「ぼく」と呼ぶのが流行っていた。私自身、初めて自分のことを「ぼく」と言ってみたとき、なんともいえない不思議な気分になった。その不思議さは、やがて気持ちよさに変化する。つながれていた紐がぱつと消えたような解放感だった。母親はとも嫌がったけれど、結局卒業するまで、私は「ぼく」だった。

たぶん同じような解放感を、味わっているのだろうなと思いつつ、今の少女らを観察している。が、ときには、これはもつと根深いものをはらんでいるのかもしれない、と思うこともある。男言葉以上に乱暴な表現を耳にしたりすると、なんだか痛々しい、とさえ思えてくる。無理にそこまで自分をもっていかななくてもいいんじゃない？

もつと肩の力を抜いたら？ と話しかけたくなる。

乱暴な言葉で自分のまわりを固めることによって、傷つきやすい心を、彼女らは守っているのかもしれない。

「ざけんじゃねえよ」「おまえにガタガタいわれたくねえな」——ごつごつしてとんがった言葉を、鎧のように身につける少女た

ち。彼女らは、何をそんなに警戒しているのだろうか。「女の子らしい言葉をつかいなさい」と叱ることは簡単だ。が、汚れたTシャツを脱ぐのとはわけが違う。言葉は、心を映すものだから。

(俵万智『かすみ草のおねえさん』)



保吉の海を知ったのは五歳か六歳の頃である。もつとも海とはい
ものの、万里の大洋を知ったのではない。ただ大森の海岸に狭苦しい
東京湾を知ったのである。しかし狭苦しい東京湾も当時の保吉には
驚異だった。奈良朝の歌人は海に寄せる恋を「大船の香取の海に碇
おろしいかなる人かもの思わざらん」と歌った。保吉はもちろん恋も
知らず、万葉集の歌などというものはなおさら一つも知らなかった。
が、日の光に煙った海の何か妙にも悲しい神秘を感じさせたのは
事実である。彼は海へ張り出した葭簾張りの茶屋の手すりにいつま
でも海を眺めつづけた。海は白じろと赫いた帆かけ船を何艘も
浮かべている。長い煙を空へ引いた二本のマストの汽船も浮かべて
いる。翼の長い一群の鷗はちようど猫のように啼きかわしながら、
海面を斜めに飛んで行った。あの船や鷗はどこから来、どこへ行っ
てしまうのであろう？ 海はただ幾重かの海苔粗朶の向こうに青あお
と煙っているばかりである。……

けれども海の不可思議をいつそう鮮やかに感じたのは裸になった
父や叔父と遠浅の渚へ下りた時である。保吉は初め砂の上へ静かに
寄せてくるさざ波を怖れた。が、それは父や叔父と海の中へはいりか
けたほんの二、三分の感情だった。その後の彼はさざ波はもちろん、
あらゆる海の幸を享樂した。茶屋の手すりに眺めていた海はどこか
見知らぬ顔のように、珍しさと同時に無気味だった。——しかし干潟
に立つて見る海は大きい玩具箱と同じことである。玩具箱！ 彼は実
際神のように海という世界を玩具にした。蟹や寄生貝は眩い干潟を右
往左往に歩いている。浪は今彼の前へ一ふさの海草を運んできた。あ
の喇叭に似ているのもやはり法螺貝というのであろうか？ この砂の
中に隠れているのは浅蜷という貝に違いない。……
保吉の享樂は壮大だった。けれどもこういう享樂の中にも多少

の寂しさのなかった訳ではない。彼は従来海の色を青いものと信じ
ていた。両国の「太平」に売っている月耕や年方の錦絵をはじめ、当
時流行の石版画の海はいずれも同じようにまっ青だった。殊に緑日の
「からくり」の見せる黄海の海戦の光景などは黄海というのにも関わ
らず、毒々しいほど青い浪に白い浪がしらを躍らせていた。しかし目
前の海の色は——なるほど目の前の海の色も沖だけは青あおと煙ってい
る。が、渚に近い海は少しも青い色を帯びていない。正にぬかるみ
のたまり水と選ぶところのない泥色をしている。いや、ぬかるみのた
まり水よりもいつそう鮮やかな代赭色をしている。彼はこの代赭色の
海に予期を裏切られた寂しさを感じた。しかしまた同時に勇敢にも
残酷な現実を承認した。海を青いと考えるのは沖だけ見た大人の
誤りである。これは誰でも彼のように海水浴をしさえすれば、異存の
ない真理に違いない。海は実は代赭色をしている。バケツの錆に似た
代赭色をしている。

三十年前の保吉の態度は三十年後の保吉にもそのまま当て嵌まる態
度である。代赭色の海を承認するのは一刻も早いのに越したことは
ない。かつまたこの代赭色の海を青い海に変えようとするのは所詮徒
労に畢るだけである。それよりも代赭色の海の渚に美しい貝を発見
しよう。海もそのうちには沖のように一面に青あおとなるかも知れな
い。が、将来に憧れるよりもむしろ現在に安住しよう。——保吉は
預言者の精神に富んだ二、三の友人を尊敬しながら、しかもなお心の
一番底にはあいかわらずひとりこう思っている。

大森の海から帰った後、母はどこかへ行った帰りに「日本昔噺」
の中にある「浦島太郎」を買ってきてくれた。こういうお伽噺を読ん
で貰うことの楽しみだったのはもちろんである。が、彼はその外にも
もう一つ楽しみを持ち合わせていた。それはあり合わせの水絵の具に
一々挿絵を彩ることだった。彼はこの「浦島

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

太郎」にもさつそく彩色を加えることにした。「浦島太郎」は一冊の中に十ばかりの挿絵を含んでいる。彼はまず浦島太郎の籠宮を去るの図を彩りはじめた。籠宮は緑の屋根互に赤い柱のある宮殿である。乙姫は——彼はちよつと考えた後、乙姫もやはり衣裳だけは一面に赤い色を塗ることにした。浦島太郎は考えずとも好い。漁夫の着物は濃い藍色、腰蓑は薄い黄色である。ただ細い釣り竿にずっと黄色をなすのは存外彼にはむづかしかった。蓑亀も毛だけを緑に塗るのはなかなかまやさしい仕事ではない。最後に海は代赭色である。バケツの錆に似た代赭色である。——保吉はこういう色彩の調和に芸術家らしい満足を感じた。殊に乙姫や浦島太郎の顔へ薄赤い色を加えたのは頗る生動の趣でも伝えたもののように信じていた。

保吉はそうそう母のところへ彼の作品を見せに行った。何か縫いものをしていた母は老眼鏡の額越しに挿絵の彩色へ目を移した。彼は当然母の口から褒め言葉の出るのを予期していた。しかし母はこの彩色にも彼ほど感心しないらしかった。

「海の色はおかしいねえ。なぜ青い色に塗らなかつたの？」

「だって海はこういう色なんだもの。」

「代赭色の海なんぞあるものかね。」

「大森の海は代赭色じゃないの？」

「大森の海だつてまっ青だあね。」

「ううん、ちようどこんな色をしていた。」

母は彼の強情さ加減に驚嘆を交えた微笑を洩らした。が、どんなに説明しても、——いや、癩癩を起こして彼の「浦島太郎」を引き裂いた後でさえ、この疑う余地のない代赭色の海だけは信じなかつた。……

（芥川龍之介「少年」）



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



日本人の平均寿命も随分と長くなった。われわれが子どもだった頃は、六十歳などというまとったくの「おじいさん」と思ったものだ。七十歳は現在では、「古来稀なり」とは言えなくなつてしまつた。七十歳を超えて生きる人の方が多くなつたのである。余程のことでもないかぎり、人間は誰しも長寿を願うのだから、このことは大変喜ばしいことだが、喜んでばかりもいられないというのが、実状ではないだろうか。というのは、寿命の延びた老人たちがいかに生きるか、という問題が生じてきたからである。

私は、二十年ほど以前に、はじめてアメリカに行ったとき、非常に印象に残つたことのひとつに、公園にたむろしている老人たちの姿があつた。昼の公園には、多くの老人たちが坐りこんでいて、何もせずじつとしていたのである。つまり、彼らは社会からも家族からも「無用の人」とされ、ただ時間をつぶすために公園にいるのである。その当時、日本はまだ物資の不足に悩んでいた。しかし、日本の老人たちの方がアメリカの老人たちより幸福なのではないかと感じたことを、今もよく覚えている。

ところで、日本もその後急激な発展を遂げ、「先進国」の仲間入りをしたわけだが、それに伴つて老人の生き方の問題も大きくなつてきたわけである。文明が進むと、どうして老人は不幸になるのか。それは、文明の「進歩」という考えが、老人を嫌うからである。文化にあまり変化がないとき、老人は知者として尊敬される。しかし、そこに急激な「進歩」が生じるとき、老人は、むしろ進歩から取り残されたものとして、見捨てられてしまふのである。

近代科学は、その急激な進歩によつて人間の寿命を延ばすことに貢献しつつ、一方では、それを支える進歩の思想によつて、老人たちを見捨てようとしている。この両刃の剣によつて、多くの老人が悲劇の中に追いやられているのである。

老人が、ただ年老いているというだけで尊敬される時代は過ぎてしまった。そこで、老人たちも「進歩」に遅れてはならないと思

う。老人たちは、そこで「いつまでも若く」ありたいと思いはじめた。若者に負けない力をもつていてこそ老人は尊敬を受けるのだから、老人も若さを保つ努力をしなければならぬ、というわけである。しかし、そんなことは可能であろうか。

最近、私はスイスの精神療法家のユングについて、『ユングの生涯』という伝記を書いた。そのとき非常に心を打たれたのは、彼の名著と呼ぶべき多くの著作が、七十歳以後に書かれていることを知つたことであつた。彼は八十六歳で死亡するが、死の一週間前も、なお机に向かつて書きものをしていたという。彼がこのような力を年老いても保つことのできた秘密はどこにあるのだろうか。

ユングは「人生の後半」の意味の重要性をよく強調する。人生を太陽の運行の軌跡にたとえるなら、人間は中年においてその頂点に達し、以後は「下ることによつて人生を全うする」ことを考えねばならない。人生の前半においては、上昇が中心の主題であり、社会的地位や家庭などを築くことが大切であるが、人生の後半においては、「いかにして死を迎えるか」に思いを致すことが重要である、というのである。生きることは、もちろん大切であるが、中年以降において、人間はいかに死への準備を完成してゆくかが大きな主題となるのである。

これは聞く人によつては、奇異な感じを受けるかもしれない。七十歳を超えてから、壮者も顔負けの多くの仕事をなしとげた人が、いかに死ぬかということ強調するのは、なんだか矛盾するように感じられないだろうか。しかし、実のところ、この点に老いることの逆説が存在しているように思えるのである。

われわれは「老い」を避けることができたとしても、「死」を避けることはできない。従つて、いかに死を受けいれるかは、いかに老いるかの中心問題であり、ここに不思議な逆説が存在していると思われる。

癌の宣告を受け、手術不能と言われてから、医者の予期に反して長く生き続ける人があることは、最近よく知られるようになった。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

このような点を研究したあるアメリカの心理学者は、興味深い結果を見出した。つまり、癌の宣告を受けて、まったく気落ちした人は早死にする。それと同時に、何とかこれに負けずに頑張り抜こうと努力する人も早死にすることがわかったのである。

それでは、長命する人はどんな人であろうか。このような人は、癌に勝とうとせず、負けることもなく、それはそれで受けいれて、ともかく残された人生を、あるがままに生きようとした人たちであった。これはもちろん、言うは易く、行なうは難しいことである。しかし、勝負を超えた生き方が存在し、そこに建設的な意味があることを見出したことは素晴らしいことだ。

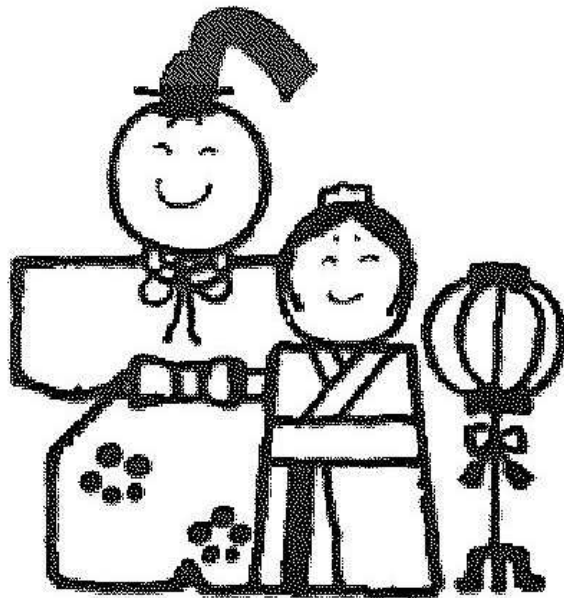
人間は必ず死ぬのであってみれば、人間はすべての進行の遅い癌になっっているようなものである。若者の戦う姿勢を老いてそのまま持ち続けることも、弱気になってしまうのもよくない。しかし、そのいずれでもない「死の受けいれ」こそが、われわれの老年をより生き生きとしたものとするのではないだろうか。ここに老いの逆説が存在しているように思う。

このように考えると、中年のときから死に思いを致すべきだと主張したユングが、死の直前まで、仕事をやり抜いた秘密もわかる気がするのである。いかにして若さを保つかに努力するのではなく、いかにして死を受けいれるかに力をそそぐことが、老いてゆくためには大切であり、その仕事は個人個人が中年から始めていくべきことである。これについては近代科学は解答を与えてはくれない。

(河合隼雄「働きざかりの心理学」)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



我が家では正月になると、一家全員で写真館に記念写真を撮りに出かけることが、松の内の行事であった。写真館に行く日取りや時間は、年末に連絡がしてあって、たいていは元旦の食事が終わってから全員で出かけた。両親と子供六人にお手伝いさんが加わる。大変だった。写真館は駅前にあって、毎年、同じ主人が同じベレー帽をかぶって現われた。

父は写真が好きで、正月、墓参り、それに子供の入学式、卒業式には必ず写真館に皆を連れて行った。入学式や卒業式は制服で行ったが、それ以外の記念撮影の時には父は姉達が制服を着て行くことを嫌った。

一度、元旦の朝、台所で姉がセーラー服を着て立っていた。母は困った顔をして姉を説得していた。写真館での撮影が終ると、いつもそのまま子供達は遊びに出かけていいことになっていたので、たぶん姉は友達と初詣か何かの約束をしていたのかも知れない。

姉は違う服に着替えて食膳に座った。そこで思い切って父に、今年の記念写真はセーラー服で行ってよいか、と言った。父は姉の顔をじつと見て、

「正月の着物を用意してもらわなかったのか」

と低い声で言うてから、母をみた。父の声が低くなる時は、怒り出す一手前だった。父がいったん怒り出したら、家の中の全てが止まってしまう。その怖さは、家族全員恐いほど知っていた。

近頃、取材で写真を撮られることが多くなった。私は写真を撮られることが苦手である。もう少し自然に、と言われても頬がひきつるばかりで、迷惑をかけることが多い。それでも子供の頃に比べると格段の進歩である。

特に写真館の撮影がいけなかった。どうしてかわからないが、あのフラッシュを焚かれると十中八九、目を閉じてしまった。

「はい、もう一度。ちよつと坊ちゃんが目を閉じましたよ」

とベレー帽の主人が私に片手を差しのべるようにして、丁寧な口調で言う。ベレー帽の口元は笑っているのだが、その目は、またこの坊主が目をつぶった、という表情をしていた。

写真は十日くらいで出来上ってきた。そこで私は笑い者になった。目を閉じていたはずの私が、フランス人形のようにマツ毛の長い少年になっている。姉達が噴き出すほどの修整がされていたのである。

一度、記念写真が撮り直しになったことがあった。私の顔の修整写真を見た父が怒り出したらしい。嫌なことになったと思った。

写真館に行く前の夜、母は私に写真を写される要領を教えてください。

フラッシュが光った時に目を閉じるのは、それまで目を開けよう開けようとしているからだ、だからそれまでは薄目になっているように、と母は言った。そうして私の背後にいる母が、撮影の瞬間に私の背中を指で突いて、合図をすることになった。これはなかなかの名案だと思った。

翌日の夕暮れ、全員で写真館に行った。父は撮影の前に別室で主人に小言を言っていた。地声の大きい人だったから、その話がスタジオで待つ全員に聞えた。私はよけいに緊張した。母を見ると笑って指を突き立ててポンと叩く仕種をした。写真館の主人が現われた。彼は額に汗をかいていた。私と主人の目が合った。それぞれの位置が決まると、写真館の主人が私の顔をじつと見て、

「坊ちゃん、もう少し目を開けましょうか」

と言った。しかし私は母との約束で、薄めを開けたままにしていた。

「坊ちゃん、もう少し……」

と主人がまた言うのと、

「何しとるんだ」

と父が大声で怒鳴った。すると、

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

「大丈夫です。撮って下さい。どうぞ」

と母が大きな声で言った。母が父の前でそんな声を出したのを、私は初めて聞いた……。

あの頃、我が家にとつて一家揃ってどこかへ出かけるということは大変なことだった。母は数日前からなにかと準備をしていた。しかし今考えてみると、母は父が痼癪を起さないようにと気を配っていたのではなく、一家全員が顔を揃えることが生活の中の節目節目の時にしかないことをよく知っていて、家のしきたりのようなものをちゃんと子供達にも継承しようとしたのではないかと思う。

年を越せない家族がまだ沢山いた時代だった。昼も夜も働いて、六人の子供や何十人かの従業員と無事に新しい年を迎えるということは大変なことだったはずだ。全員が元気に年を越せた証の行事を、母が一番喜んでいたのではないだろうか。

いつの頃からか、私や姉達は正月に帰省しなくなった。

元日の朝、緊張して父の前に並んだ母や姉達、そして私がいた。

その時間が今ひどく大切なもの思えて仕方がない。懐かしんでいるのではない。正座をして目上の人の前に座るように、家族が元日という時間の前に正座をしていたように思う。あの張りつめた時間は、ピンと張った家族の糸だったのではなからうか。

母が私の背中を押してくれた日の写真。私は前に突んのめつて、ビックリした顔で写っている。目は、開きすぎるほど開いて……。

(伊集院静「正月の風景・家族の糸」)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



小雨が霏のようにけぶる夕方、両国橋を西から東へ、さぶが泣きながら渡っていた。

双子縞の着物に、小倉の細い角帯、色の褪せた黒の前掛をしめ、頭から濡れていた。雨と涙とでぐしよぐしよになった顔を、ときどき手の甲でこすするため、眼のまわりや頬が黒く斑になっっている。ずんぐりした軀つきに、顔もまるく、頭が尖っていた。――彼が橋を渡りきったとき、うしろから栄二が追って来た。こっちは痩せたすばしっこそうな軀つきで、おもながな顔の濃い眉と、小さなひき緊った唇が、いかにも賢そうな、そしてきかぬ気の強い性質をあらわしているようにみえた。

栄二は追いつくとともに、さぶの前へ立ち塞がった。さぶは俯向いたまま、栄二をよけて通りぬけようとし、栄二はさぶの肩をつかんだ。

「よせつたら、さぶ」と栄二が云った、「いいから帰ろう」

さぶは手の甲で眼を拭き、咽びあげた。

「帰るんだ」と栄二が云った、「聞えねえのか」

「いやだ、おら葛西へ帰る」とさぶが云った、「おかみさんに出ていけて云われたんだ、もう三度めなんだ」

「あるきな」と云って栄二は左のほうへ顎をしゃくった、「人が見るから」

二人の少年は橋のたもとを左へ曲った。雨は同じような調子で、殆んど音もなくけぶっていた。

「おらほんとに知らなかったんだ」とさぶが云った、「ゆうべ粉袋を戸納へしまつてたときに、勝手に使うから一つ出しておけて、おかみさんに云われた、だから一つだけ残しといたんだ、そしたらその袋が出しつ放しになつてて、おかみさんは使ったあとでしまつてけつて、その袋を返したのに、おれがしまい忘れたっていうんだ」

「癖だよ、癖じゃねえか」

「粉が湿気をくっちゃつた、へまばかりする小僧だつて」さぶは立停つて、手の甲で眼のまわりをこすりながら泣いた、「――おら、返してもらわなかった、そんな覚えはほんとにねえんだ、ほんとに知らなかったんだ」

「癖だつてば、おかみさんはなんとも思つちやあいねえよ」

「だめだ、おら、だめだ、ほんとにとんまで、ぐずで、――自分でも知つてた、とても続けられやしねえ、もうたくさんだ」さぶは喉を詰らせた、「おら、思うんだが、いつそ葛西へ帰つて、百姓をするほうがましだつて」

広い河岸通りの、右が武家屋敷、左が大川で、もう少しゆくと横網になる。折助とも人足ともわからない中年の、ふうていのよくない男が二人、穴のある傘をさして、なにかくち早に話しながら、通りすぎていった。その男たちの、半纏の下から出ている裸の脛が、栄二にはひどく寒そうにみえた、さぶはあるきだしながら、小舟町の「芳古堂」へ奉公に来てから三年間の、休む暇もなくあびせられた小言と嘲笑と平手打ちのことを語った。それは訴えの強さではなく、赤児のなが泣きのような、弱よわしく平板なひびきを持っていた。大川の水がときたま、思いだしたように石垣を叩き、低い呟きの音をたてた。

「奉公が辛いのはどこだつておんなしこつた、おかみさんの口の悪いのは癖だし」と栄二はつかえつかえ云った、「それにおめえ、女なんてもともと、――車だ」

栄二がさぶの腕に触り、二人は立停つて川のほうへよけた。からの荷車を曳いた男がうしろから来て、二人を追いついていった。

「腕に職を付けるのは辛えさ」と栄二は続けた、「考えてみな、葛西へ帰つたつて、朝から晩まで笑つてくらせやしねえだろう、それとも百姓はごしよう楽か」

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

「葛西のうちらなら」とさぶが云った、「出ていけなんて云われることだけはありやしねえ」

「ほんとにそうか」

さぶは返辞をしなかった。栄二も返辞を期待していなかった。さぶは葛西にある実家のことを考えてみた。腰の曲った喘息持ちの祖父、気の弱い父と、男まさりで手の早い母、朝から母と喧嘩の絶えない口やかましい兄嫁、三人いる弟妹と、呑んだくれの兄と、五人もいる甥や姪たち。うす暗く煤だらけな、古くて狭くて、ぜんたいが片方へ傾いている家や、五反歩そこその瘦せた田畑など。さぶは途方にくれ、しゃくりあげながら、またあるきだした。

「おめえにやあ田舎がある」いっしょにあるきながら栄二が云った、「どんなうちにしろ帰るところがあるからいい、だがおらあ親きようだいも身寄りもねえ独りぼっちだ、今年の春、おらあ店を追ん出されるようなことをしちまった、追ん出るか、どっちか一つという、とんでもねえことをしちまったんだ」

さぶはそろそろと振り向いて、栄二の顔を見た。好奇心からではなく、戸惑ったような眼つきであった。栄二はふきげんな、怒ってでもいるような口ぶりで、自分が去年から幾たびか帳場の錢をぬすみ、それを主婦のお由にみつかったのだ、と告白した。

お由は二度だけしか見なかったのだから、それともすっかり知っていて、わざと知らないふうをよそおったのか、いずれにもせよ、栄

二は死ぬほど恥じ、もう店にはいられないと思った。自分をぬすつただなどとは考えもしなかったが、錢箱から錢をつかみだした自分の

姿が、あさましくて恥ずかしくて、そのまま店にいる気になれなかったのだ。

「だが、店をとびだしてどこへゆく」と栄二は続けた、「おらあ八つの年、大鋸町で夏火事にあい、両親と妹に焼け死なれた、おれ一人は白魚河岸へ釣りにいって助かったが、ほかに身寄りは一軒もなかった、おやじは伊勢から出て来たと云ってたが、伊勢のどこだかおらあ覚えちやいねえし、覚えていたって頼ってゆけるもんじゃあねえ、おらあそのときくれえ自分にうちのねえことが悲しかったこたあなかった」

「知らなかった、おら、ちつとも知らなかった」とさぶが呟いた、「——それで栄ちゃんは、がまんしたんだね」

「錢も二度とはぬすまなかった」

二人は横網の河岸まで来てい、さぶが立停つて、地面をみつめ、濡れて重くなった草履の先で、地面を左右にこすった。

(山本周五郎「さぶ」)



オーストラリアのヨーク半島のつけね、西側にいたイルリイヨロン族の変化を見てみます。

かれらは食料採集民で、狩りをしたり木の実を集めたりという生活をしていました。かれらにとつても石斧は男のものでした。奥さんや子供が借りることはできませんでしたけれど、借りるとき、返すときのあいさつは、夫は妻に、父は子に優位に立っていることを確かめる機会でした。そこへ白人がやってきて、鉄の斧が入ってきました。イルリイヨロン族の人びとが白人の手助けをすると、その代償として鉄の斧をくれたりします。ときには、奥さんが鉄の斧をもらうことがあります。夫のほうは石の斧しかもっていないのに、奥さんが鉄の斧をもっていることになりました。そうすると、「すまんけど、おまえの鉄の斧を貸してくれ」ということもおきてきます。これが石が鉄に代わったことでおきたさまざまな結果の一つです。

もっと重要なことは、イルリイヨロン族が浮いた時間をどう使ったかということです。この点にいま私は大きな関心をもっています。

浮いた時間を使って、なんとかれらは昼ねをしたのです。私はじつは、その部分を読んだときに吹き出してしまいました。この笑いは軽蔑の意味もふくまれていたと思うのです。ところが、私のこの感想はじつはまちがっていた、といまは思っています。

二千年前、日本ではどうだったでしょうか。石から鉄へと変わってきたときに、弥生人はおそらく浮いた時間で宴会に出席することも、昼寝をすることもしませんでした。石から鉄への変化を、生産力の飛躍的な増大につなげたのです。いままで石の斧が一本倒している時間で、四本倒すというぐあいに、すごく生産力を高めたのです。

四世紀、六世紀（古墳時代）の農民が働き者だったことは、群馬県で火山の噴火や洪水の直後に復旧工事にとりくんだ証拠からわかっています。また、日本の農業が草をとればとるほど、よい収穫

を約束される農業であることから、弥生農民が働き者だったことを、私は予測しています。

パプアニューギニアやオーストラリアでは浮いた時間を遊びに使ったのに、日本では労働に使ったということで、日本人は勤勉だと先祖をほめたたえるつもりか、と思われるかもしれません。そうではありません。

道具や技術は、毎年のようにどんどんすぐれたものになっていきます。なんのためだと思えますか。質問すると、すこしでも楽になるようにとか、効率がよくなるようにとか、企業がもうけるためだとかいう答えがよくもどつてきます。しかし、結果から見ると、私はそうではない面もあると思うのです。

じつは、私たちが忙しくするために道具や技術は発達してきているのではないのでしょうか。それまで十時間かかったところを、三時間で行くことができるようになったとします。浮いた七時間をどう使うかと考えてみると、ほかの仕事をしているのです。

すくなくともつい最近までは、歩いている時間とか車に乗っている時間はポケットとしていることができませんでした。あるいは空想にふけることができました。しかし、いま携帯電話ができたのです。歩いていても、車に乗っていても、いつ電話がかかってくるかわかりません。相手からだけでなく、自分からもかけます。なにもそんなときまでと思うのですが、そんな大人たちが増えています。

私たちは、技術や道具の発達は自分たちを解放するためだと思っ

ていますが、じつは大きな誤解で、自分たちを忙しくするために技術や道具が発達している面もあるのではないかと思うのです。そこで私は思うのです。オーストラリアのイルリイヨロン族が浮いた時間を寝たというのは、正解だ、と。

多田道太郎さんは、つぎのようなことを私に語ってくれました。

『日本には「休む」とか「怠ける」ということばがあるけれども、みんな悪い意味で使われている。しかし、私たちは、むしろ強制されたことはなにもしないという状況に自分をおくことがたいせつだ。そういう状況のなかで、自由にしたいことをする、それが

遊びだ。』

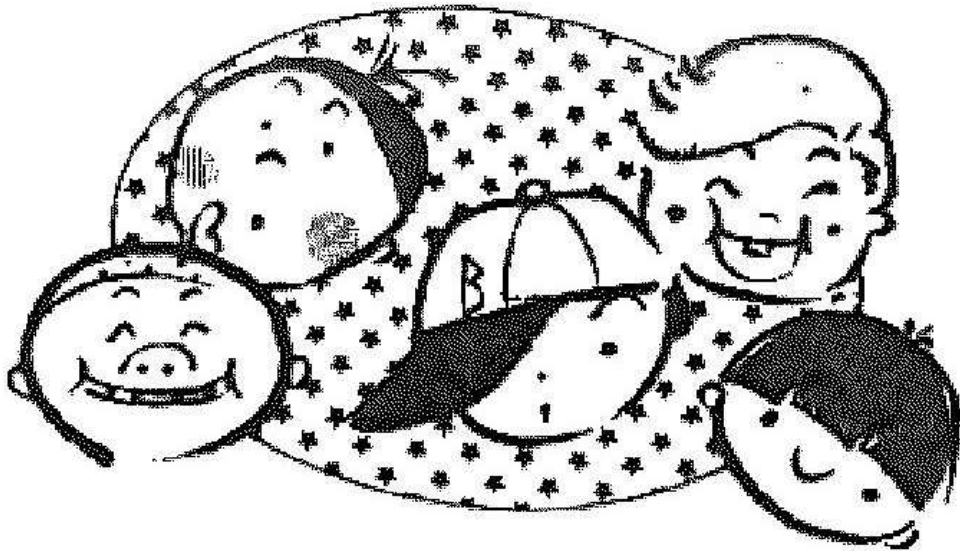
多田さんのいうことのなかに、私にとつてひじょうに重要なことがふくまれていました。それは、強制されている状況からは空想力がはばたくはずがない、休んではじめて人間の構想力とか空想力がはばたくのだということです。働きづめに働いていると、そのあげくに出てくることは、しよせんたいしたことはないのだということです。空想力は想像力とおきかえてもいい。アインシュタインが知識よりも想像力のほうがずっとたいせつだ、といっていることを思いだします。

たしかに日本人は働きすぎだと思います。私たちはもうすこし余裕をもって、いい意味での怠惰の精神、遊びの精神で生きていくべきではないでしょうか。これをなによりもまず自分自身にいいたいと思います。もつと余裕をもって、遊びをもつて生きていったらいのです。ではないか、それをイルルイヨロント族に学びたいという思いなのです。

(佐原真「遺跡が語る日本人のくらし」)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



読解問題 1月4週分

問1 読解マラソン集4番「十年ほど前、ボルドーの近くを」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A フランスではあやまった方が、非をすべてかぶらねばならない、ということが多い。
B リリアヌ・エルさんは、「フランス人は自分を正当化したりしない」と言っている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集4番「十年ほど前、ボルドーの近くを」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 日本は「ごめんなさい」とあやまることで、許しを得られるという文化を持つ社会である。
B 著者はフランスでの事故で、先にあやまってしまったことを悔いている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集4番「十年ほど前、ボルドーの近くを」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 頭を下げてあやまるのは日本人だけである。
B 「自分が悪かった」という言葉について考えると、日本人のそれより、フランス人のほうが重みがある。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集4番「十年ほど前、ボルドーの近くを」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 日本では、言い訳をするより、潔くあやまる方が許しを得られることが多い。
B 日本通の外国人が、まず最初に習得するのは、頭を下げてあやまるという行為である。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集4番の「十年ほど前、ボルドーの近くを」を読んで、次の問いに答えなさい。

- 本文の内容に合うものはどれでしょう。一つ選んで番号で答えなさい。
1 リリアヌ・エルさんは、「フランス人は自分を正当化したりしない」と言っている。
2 フランスではあやまった方が、非をすべてかぶらねばならない、ということが多い。
3 著者はフランスでの事故で、先にあやまってしまったことに後悔はない。

問6 読解マラソン集4番の「十年ほど前、ボルドーの近くを」を読んで、次の問いに答えなさい。

- 本文の内容に合うものはどれでしょう。一つ選んで番号で答えなさい。
1 日本は「ごめんなさい」とあやまることで、許しを得られるという文化を持つ社会である。
2 頭を下げてあやまるのは日本人だけである。
3 「自分が悪かった」という言葉について考えると、フランス人のそれより、日本人のほうが重みがある。

問7 読解マラソン集4番の「十年ほど前、ボルドーの近くを」を読んで、次の問いに答えなさい。

- 本文の内容に合わないものはどれでしょう。一つ選んで番号で答えなさい。
1 日本では、言い訳をするより、潔くあやまる方が許しを得られることが多い。
2 「悪かった」と言っても、日本では勇気ある行為とはいえない。
3 日本通の外国人が、まず最初に習得するのは、頭を下げてあやまるという行為である。

問8 読解マラソン集4番の「十年ほど前、ボルドーの近くを」を読んで、次の問いに答えなさい。

- 「普遍的」の意味で正しいものはどれでしょう。一つ選んで番号で答えなさい。
1 普通に見えるがかたよりがあること。
2 すべてのものに共通しているさま。
3 すべてのものに共通するおかしな点。

読解問題 2月4週分

問1 読解マラソン集5番「学生さんが引き取ってほしい、と」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 私^{わたし}は、古本屋は本を売らねばならぬ使命があると思っている。
B 古本屋は、学生の熱心さに負けて、もしかしたらその本が売れるかもしれないと思った。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「学生さんが引き取ってほしい、と」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 学生は、言われたとおり、買入れ値^{ちわりま}の五割増^かしでその本を買戻^かした。
B 学生は自分の持ってきた本が、古本屋に並んだら、きっとよく売れるだろうと思っていた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「校庭^{すみ}の隅の水道場で」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 竜夫と英子^{えが}は小学校時代からの友達であった。
B この物語^{ものがたり}の描いている季節は、ちょうど夏休み明けのころである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「校庭^{すみ}の隅の水道場で」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 千代は、竜夫^{たつお}の家にいるお手伝いさんである。
B 竜夫は、英子の写真^{えが}をもらったことを通して、自分の英子に対する気持ちを伝えようとした。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「うるせえんだよ、あいつ」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 女の子が使う「ぼく^{らんぼう}」には、社会が押しつける女の子らしさへの反発^{ていこう}があった。
B 現代の少女は、乱暴な言葉を使うことに最初から抵抗がない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「うるせえんだよ、あいつ」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 乱暴な言葉をつかうことによって、少女たちは自分を守ろうとしている。
B 言葉づかいだけでなく、心は自然には変わらない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「保吉^{やすきち}の海を知ったのは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 保吉は初めて間近に見た海は、青い色ではなかった。
B 母親は、海の色は青く塗るものだと思っていた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「保吉^{やすきち}の海を知ったのは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 保吉は、海が青くないことをいつまでも否定しようとしていた。
B 保吉は、初めての海が怖くて、なかなか海に入れなかった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 3月4週分

問1 読解マラソン集9番「日本人の平均寿命じゆみようも」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字きすうを書きなさい。
■二十年ほど前すわに見た公園に座っていたアメリカの老人は、急激な進歩きゅうげきから取り残されてしまった人々だった。
1 ○ 2 ×

問2 読解マラソン集9番「日本人の平均寿命じゆみようも」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字きすうを書きなさい。
■癌がんの宣告せんこくを受けて、まったく気落ちした人は早死がんばんめにするが、頑張り抜こうと努力する人は助かるものだ。
1 ○ 2 ×

問3 読解マラソン集10番「我が家わがやでは正月に」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字きすうを書きなさい。
■我が家わがやで記念撮影さつえいをする時は、姉達はいつも制服で行くように父に言われていた。
1 ○ 2 ×

問4 読解マラソン集10番「我が家わがやでは正月に」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字きすうを書きなさい。
■私わたしが笑い者わかしになってしまったのは、目を閉じて撮影さつえいされたのがフランス人形のようにマツ毛の長い少年に修正されていたからだ。
1 ○ 2 ×

問5 読解マラソン集11番「小雨が霧のようにけぶる」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字きすうを書きなさい。
■「あるきな」と云って栄二はさぶあこの顎あごをなぐった。
1 ○ 2 ×

問6 読解マラソン集11番「小雨が霧のようにけぶる」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字きすうを書きなさい。
■さぶはどう考えても「芳古堂」より、葛西にある実家ほうこどうのほうかさいがずっといいと思っている。
1 ○ 2 ×

問7 読解マラソン集12番「オーストラリアのヨーク半島」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字きすうを書きなさい。
■石が鉄に代わったため仕事の能率ひるねが高まり、イル＝イヨロント族は仕事から自分たちを解放した。
1 ○ 2 ×

問8 読解マラソン集12番「オーストラリアのヨーク半島」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字きすうを書きなさい。
■携帯電話けいたいのような便利な道具うの発達で、日本人も浮いた時間ひるねに昼寝ひるねをすることを覚えた。
1 ○ 2 ×

1 ～ 3 月

小1 コード: nane ス:	小2 コード: nane ス:	小3 コード: nane ス:
小4 コード: nane ス:	小5 コード: nane ス:	小6 コード: nane ス:
中1 コード: nane ス:	中2 コード: nane ス:	中3 コード: nane ス:
高1 コード: nane ス:	高2 コード: nane ス:	高3 コード: nane ス: